■直に感心してしまふ日本人

この「直に感心してしまふ」といふ事が、これまた典型的な日本人の特徴の一つだと私は思ふ。日本人位、外国の文物を熱心に取入れて来た民族は他に無いと思ふが、これは、「直に感心してしまふ」事の結果ではないだらうか。

外国では、よその文化を取人れる場合は、その文化が自分たちの文化より優れてゐる事がはっきりしてゐる場合に限られてゐて、だから、自分の文化を捨ててその文化を取人れるのである。ところが、日本の場合は、自分の文化と比較して優劣を決めることなく、それが良いと思へば、自分の文化を捨てることなくそれを取入れる。言はば、「文化の接ぎ木」をするのである。

例へば、宗教にしても、仏教が渡来すればこれを神ながらの神道に接ぎ木をしてゐる。儒教が入って来れば、これもまた神道に接ぎ木をするのである。仏教や儒教が優れてゐるからと言って、伝統の神道を決して捨てることをしない。また、反対に、神道を最高の道と信ずる者でも、仏教・儒教の取るべきものは取って決して退けてしまはない、これが「日本の心」なのである。

ここが、我が日本人が外国人と大いに違ふ所である。イギリス人でもフランス人でも、またドイツ人でも、キリスト教を取人れるに当っては、それまで自分たちの信じて来た宗教を捨ててゐる。自分たちの宗教にキリスト教を接ぎ本したのではないのである。

そもそも、日本人の神に対する信仰には、外国人のそれとは非常に異るものがある。例へば、日本人の“祈り”は“い宣り（古語では“い行く”といふやうに動詞に“い”を冠して言ふ語法があった）”であって、神に宣言するものであり、ただひたすらに「加護を賜はれ」と願ふものではない。古歌に「心だに誠の道に適ひなば、祈らずとても神や護らむ」とあるが、これは典型的な日本人の神に対する姿勢だと思ふ。だから、武将が出陣に際し、「神よ、照覧あれ」と祈るのである。これは、決して「加護を賜はれ」とひたすらに願ふ言葉ではない。「神の加護に値ひする人間である事を神よ照覧あれ」といふ事であって、これはやはり“宣言”であり、だから“い宣り”だと思ふわけである。

神に対する日本人のこのやうな姿勢は、日本人が昔から豊かで穏かな自然に恵まれて、平和な生活を享受できたので、神に対してはただ感謝あるのみであって、この上、加護を願ふ必要が無かったからだと思ふ。これに反して、欧米人たちは、（序論で述べた事であるが）日本人が「自然の懐に抱かれる」と言って来たのに対して、「自然を克服する」と言ってゐることで解るやうに、厳しい自然の中で生きて来たのである

から、神に対する態度が日本人とは根本から違ってゐて当然だと思ふ。